

責任編集 松田道雄「貝原益軒」中公バックス、日本の名著 14、中央公論社 1973年11月10日刊  
を読む

楽訓

—後論—

## 1. 人の命

- (1) つくづく人の命を考えてみると、世間では長生きする人は少ない。
- (2) 幼時から四十までのあいだに早死にする人が多い。
- (3) 五十を不夭ふようという。
- (4) 不夭ふようというのは、若死にではないという意味である。
- (5) 六十を下寿かじゆとし、七十を古稀こきといったのは、うまくいったものだ。
- (6) 若いときから親しくしていた人たちの面影が目の前に見えるが、多くは亡くなって年がたつのはまことに悲しい。
- (7) 花が春ごとに開くのを見ても、昔の人がかえって来ないのが残念だ。
- (8) これを考えると、自分が長生きしたのをよろこばねばならぬ。白髪がつぎからつぎと新しいのをなげいてはいけない。

## 2. 天命を楽しむ

- (1) 同じく人と生まれて富貴な人もあれば、貧賤な人もある。
- (2) その高下の位はまことに多い。
- (3) 富貴な人は贅沢をしないで人に恵むのを楽しみとすべきだ。
- (4) 乞食も生まれついた分があつて、定まっていたことをさとして、分に安んじて楽しまないといけぬ。
- (5) たとえば松は高さ数十尺に達するが、灌木かんぼくは低くて数寸しかない。
- (6) 同じ木であるのに、長短がそれぞれ違うのは、生まれつき定まっているからである。
- (7) きわめて貧しい人も、わが分の低いことに安んじて悲しんではならぬ。
- (8) おのれに生まれつかぬ富貴をうらやんではならぬ。
- (9) また世間では自分ほどでもない人が多い。自分より下の人を見て、わが分を楽しむがよい。上をうらやんではいけない。
- (10) また同じ人と生まれたのに長寿の人もあれば短命の人もある。
- (11) 長い短い、いろいろ種類が多くて、一々数えられない。
- (12) 富貴をきわめて万事思いどおりになる人も、ただ命の幸いだけは思うようにならない。
- (13) しかしこれも生まれついた天命できまっているのだから、短いといって悲しむべき理ではない。
- (14) この理に達し、天命を楽しんで身を終るがよい。
- (15) 死ぬ時に苦しみ悲しむなら、平生楽しんだとしても甲斐がない。終りを慎むがよい。
- (16) たとえば松は千年をたもつが、朝顔の花は一日だけである。
- (17) 長い短いそれぞれ異なり、生まれつき定まっている分であるから、短いものは長いものをうらやんではいけない。

(18)めいめいその分に安んじるべきである。

### 3. 楽しみを知らぬ人

- (1)この世にあってこの世の楽しみを知らぬ人がある。
- (2)富貴の人は、善を行ない人を助けて楽しむ道を知らない。
- (3)清福の人は清福の楽しみを知らない。
- (4)病気の無い時は病気の無い楽しみを知らない。
- (5)ちょうど眠った人が夢を見ていて、それが夢だと知らないようなものである。

### 4. 太平の楽しさ

- (1)栄啓期えいけいき（春秋時代の人）が、三楽とは、人と生まれたこと、男子（「男子・女子」とすべき。林）と生まれたこと、長生きしたことだといったのは、まことにそのとおりである。
- (2)今の世の人はこのうえにもうひとつ大いに楽しむべきことがある。
- (3)これを知って各人が楽しまないといけない。
- (4)その楽しみとは何か。
- (5)大君（徳川将軍）の御恵みによって、こういう太平の御代に生まれ、堯・舜の仁にあって、白髪になるまで戦争にあわなかった。
- (6)これは大きな楽しみではないか。
- (7)邵康節しょうこうせつ（邵雍、北宋の学者）が世に感謝した言葉に「太平の世に生まれ、太平の世に老い、太平の世に死ぬる」といったのは、まことに大きな幸いである。
- (8)今の世の人はみなそうである。
- (9)乱世に生まれると、朝夕いくさを事とし、あるいは難をのがれて身のおき所もなく、あるいは盗賊に追われて山や海にのがれ、夜はひとり歩きができぬばかりか、昼間でも仲間がつかれていかないと近いところでも往復できなかつたという。
- (10)老いては身の死なないのを嫌うといったのは、昔の人が乱世の苦しみをいったのである。
- (11)こういう世に生まれた人の苦しみは、今から思いやるのも悲しい。
- (12)昔から乱世は多く治世は少ない。
- (13)今の人は昔、兵乱の世がながくつづいて不幸に悲しんだことを思いやって、わが大君の御恵みと今の世の太平の楽しみとを忘れてはならない。
- (14)蓼たての虫は蓼のからいことを知らない。
- (15)今の世に生まれて今の世の楽しみを知っている人は少ない。
- (16)昔のことを思いやって今の世を楽しまないといけない。

### 5. わが身の楽しさ

- (1)私などは才もなく徳もなく、君を助け民を救う仕事もしていないのに、一歩ふの田もつくらず、一本の麻も植えないで、十分に食事をし、暖かい衣服を着、家にいて風雨におかされない。
- (2)これは大きな幸いである。
- (3)農夫は日夜耕作に苦しんでいるのに、飢え凍えをまぬかれない。
- (4)あわれなことである。
- (5)これを思うとわが身は貧しくても悲しまずに楽しまねばならぬ。
- (6)外を求め上を願うのは、おごって分を知らないのである。
- (7)古い言葉に「上にくらぶればたらざれども、下にくらぶれば余りあり」とある。

(8)これを忘れないで、わが身を楽しむべきだ。

## 6. 今の世の楽しさ

- (1)万事そのはじめ、ものがまだそなわらなかつた時を思って今とくらべれば、苦しみがなく楽しみが多いだろう。
- (2)上古の時は野に生活し、穴の中に住んでいた。
- (3)食べる五穀もなく着る布もなかつた。
- (4)いろいろの器がなく、ものを煮て食べることを知らなかつた。
- (5)その苦しみを思いやってみるがいい。
- (6)今の世の人は上古にくらべると、事ごとに備わっていて楽しいことだ。
- (7)また自分をはじめ貧賤だつた時の苦しみを思って、今の時にくらべるがよい。
- (8)戦国の時のつらかつたのを思って、今の太平を楽しまないといけなひ。

## 7. 無限の楽しみ

- (1)人ごとに生まれつゝいた楽しみがあるが、学ばないと自分のものになつていながらわからない。
- (2)多くの人の楽しみはみな外欲にある。
- (3)これをほしいままにすると、かえつてわが身の禍がおこつてくる。
- (4)君子は学んで道を楽しみ、天命に安んじて貧を憂えない。
- (5)楽しみを得ては書を読み、時節を感じ、風景になれ親しみ、月花をめで、詩歌を吟じ、草木を愛する。
- (6)このたくさんのかつたことをかゝるがわる楽しめば、朝夕の楽しさは、きわまるところがないだろう。
- (7)老いては心を安らかにし、身を楽にして貧賤に甘んずるのが、折りにかゝつてよろしい。
- (8)こういう時に楽しまなかつたら、月日は過ぎてとどまらない。
- (9)惜しまねばならぬ。
- (10)これほど世には無限の楽しみがあるのを知らないで、何かにつけ悲しみ苦しんで過ごすのは、まことに不幸な人で、一生をむなしくするといえよう。

## 8. 善の楽しみ

- (1)人の楽しみにみには善を行なうより楽しいものはない。
- (2)漢の東平王とうへいおう(明帝の弟)が「善をするはいと楽し」といつた。
- (3)そのとおりで。
- (4)富貴の人はひろく人を愛し、諸人を救つてその楽しみはひろい。
- (5)貧賤の人もその分に応じて人を救う志さえあれば、善行が多かろう。

## 9. 身やすく心おだやかに

- (1)老いては、ますます人に気まをいわず、物事を熟慮し、人をむやみにそしらず、怒らず、人のさまたげとならず、人がわれに無礼不仁なのをこらえて、うらまず怒らず、誰でもが君子なのではないから、こうもするだろうと思つて、心にかけて苦しみ悲しまない。
- (2)貧賤に甘んじ、身やすく心おだやかにして楽しむべきである。

## 10. 死期は遠くない

- (1)天は長く、地は久しくてきわまりない。
- (2)人は天地人と三つにならべられるが、命の短いことはまるで朝顔のようで、一生の過ぎやすいことは行きずりの人のようである。
- (3)歳月は過ぎてとどまらず、時節は去って流れるがようである。
- (4)李白の詩に「人生は大夢の如し、なんすれぞこれ生をくるしむ」とある。
- (5)およそ人の命は上寿は百歳、中寿は八十、下寿は六十という。
- (6)下寿を保つ人もまた多くない。七十の人はまれである。
- (7)こういう短い年のうちを一日でも善を行なわず、楽しまずに、むだに暮らしてはならない。
- (8)古歌に「世の中をかくいひいひてはてはてはいかにやいかにならんとすらん」といったのは、いまさら驚くことではないが、およそ人はみな、かりそめの定めのない身を持ちながら、死期の近いのを知らず、平生は間違っ<sup>て</sup>て百年の計を立てている。
- (9)老いの身はとくに残った生命のいくほどもなく死期の近くにあるのを忘れてはならぬ。

#### 11. 不幸をくらべてみると

- (1)もしわが身に不幸があったら、古今の大きな不幸にあった人のそれに、自分の不幸をくらべてみると、自分の不幸はそれほどでもなくなり、うらみがなくなるだろう。
- (2)これはつたない計のように聞こえるだろうが、いにしえの賢者の教えである。
- (3)これをやってみると効果のあることが多い。
- (4)この計はすてがたい。

#### 12. 天命に任せて

- (1)もし不幸にも悲しみが多かったら、わが身はもとから、こうなるように生まれたのだと思い、天命にまかせて死ぬまでは楽しみ、悲しまずに過ごしたい。
- (2)達人は命を知って憂いがない。

#### 13. 白髪を見て

- (1)世には白髪を見ないで死ぬ人が多い。
- (2)道を知らないで死ぬのはことに心残りが多い。
- (3)この世のありさまさえ知らずに、早死にするのは惜しい。
- (4)私などは白髪を見ること久しい。
- (5)幸いとせねばならぬ。
- (6)東坡の詩に「人は白髪を見てうれしい、我は白髪を見てよろこぶ」とあるのもそのとおりだ。

#### 14. 晩節を保つ

- (1)年老いて、夕日の傾くように死ぬべき時が近づいてきたら、天命に安んじて悲しむべきでない理を知らないといけない。
- (2)『易』の離の卦に「ほとぎをたたきてうたわずんば、ついに大蠹だいてつのなげきあらん」とある。
- (3)ほとぎとは人のそばに日用使う器である。
- (4)これをたたいてうたうとは、悲しみなく楽しんで日を送ることである。
- (5)大蠹のなげきとは、夕日が天に傾くのなげくのいう。
- (6)人が老いて死に近づいて、夕日の傾くようになるのは、これは当然の常の理であるから、なげいてはいけない。

- (7)なげくのは常の理を知らぬもので愚かである。
- (8)だから凶といったのである。
- (9)これはつねに楽しんで、老年になるのをなげいてはいけないというのである。
- (10)人間が若年から老年になり死に近づくのは、四季のまわってくるようなもので、定まった常の理である。
- (11)それなのに老年をなげき死を苦しむのは、理に暗いというべきである。
- (12)天命を知らぬからである。
- (13)『易』ではこれを戒めて、あのよう<sup>か</sup>にいったのである。
- (14)淵明<sup>えんめい</sup>（陶潜、六朝時代、晋の詩人）が「いささか化（死滅）に乗じて、尽くるにかえらん、彼の天命を楽しんで又何をかうたがわん」というのは、尽きるものは尽きるがよい、くよくよすることはないということである。
- (15)また「朝に仁義と生くれば夕に死すともまた何をか求めん」ともいった。
- (16)まことに達人の言葉である。
- (17)曹子建<sup>そうしけん</sup>（曹植、三国時代、魏の詩人）の詩にも「先民誰か死なざる、命を知りてまた何をか憂えん」とある。
- (18)まことにいにしえから死なない人はない。
- (19)天命を知らないで天運に任せようとしなかったら悲しみは多かろう。
- (20)平生のよい人も終りをよくしないのは、一生の勤めが空しくなったことで惜しむべきである。
- (21)晩節を保つことを心にかけないといけない。

## 15. 朝に道を聞けば

- (1)つくづく思えば、楽しみの多いこの世なのを、道を知らないために、われとわが心を苦しめ、天をうらみ、人をとがめる。
- (2)このように道を知らないために憂いの多い人は、途方にくれる心の闇が愚かなのだといえよう。
- (3)人の身は金石ではない。
- (4)生きているもので、最後には死なぬというものはない。
- (5)また二度と生まれてくる身でないから、この世にある間は楽しんで生きねばならぬ。
- (6)口悔しくも過ぎた昔のことは、どうにもしようがない。
- (7)いくばくもない生命であるから、今からのちは一日も月日を惜しんで、以前の間違いを悔いで、飛驒<sup>ひだ</sup>の大工<sup>たくみ</sup>のうつ墨縄ではないが、ただ一すじに善を好み、道を楽しんで過ごすのが、この世に生きる甲斐であろう。
- (8)年老いては同じことをするくせがあるので、くりかえし自分にいいきかせ、心を戒め、また人にも楽しみをすすめる仲だちとしよう。
- (9)かえすがえすわれも人も、生まれついた楽しみを知らないで、身をむだにし、甲斐なく朽ちていくのは残念である。
- (10)もし朝に道を聞けば、人となった甲斐があるもので、夕に死んでもまた何をかうらもう。

<コメント>

「幻の名著」、貝原益軒、81歳の著、「楽訓」の最終章。このような文章に中学・高校生の中から慣れ親しみ、人生の大切なときに繰り返し読み返し自分自身のものにしておいたなら、このような人生・生き方にはならなかったと思う人が大半ではないかと思う。人生の一つ一つの時期を大切にしながら全うするのに、この「楽訓」ほどよいテキストはない。一日も早い復刊が望まれる。

2021年10月25日(日) 林明夫